

第1回教育振興ビジョン検討第2部会 議事録

日 時 平成21年11月12日(木) 13:00~15:35

場 所 水産会館 研修室

出席者 (委員)川本 健、杉浦 礼子、田尾 友児、高屋 充子、中村 武志
松岡 美江子、山田 康彦、今野 明子、杉嶋 克之、村林 守
(事務局)山口副教育長、真伏教育支援分野総括室長
平野教育総務室長、岩間教育改革室長、増田人材政策室長
土肥高校教育室長、鈴木小中学校教育室長
福永教育振興ビジョン策定特命監、川上、安田

計20名

内 容

(事務局)

ただいまより教育改革推進会議第1回教育振興ビジョン検討第2部会を開会させていただきます。本日は本部会の最初の会議ですので部会長を選任していただきますまでの間、教育総務室の平野が進行を務めさせていただきます。開会にあたり、山口副教育長より一言ごあいさつ申し上げます。

(副教育長)

委員の皆様方にはお集まりいただきありがとうございます。教育改革推進会議というのは、条例設置の審議会ということで県教育委員会としては大変重い会議です。その中で本年度から次期の教育振興ビジョンを作っていたとということで、集中的に審議をしていただくこととしています。

現在の三重県教育振興ビジョンは、平成11年3月に策定されました。この時は、33名の委員さんにご参加いただき、起草委員会も作って、委員さんたちに精力的に議論していただきました。全国的にも、数値目標を掲げたことが話題になり、欧米並の少人数学級をやろうということや高校入試を全廃しようということやゆとり教育、障がいのある子もない子もしっかり学ぼうということなどについて書き込みました。策定からこれまでの間にできなかったこともありますし、なんとかこぎ着けたという部分もあります。このビジョンを越えるものをどのようにして作っていくのかということがいろいろなところで話題になっています。

2日前にも、第3部会というのがありまして、「豊かな心」あるいは「規範意識」をどう育てていくのかということを議論いただきました。当部会は学力ということでございまして、学力保障というのは、子どもたちが大人になるにあたって、一番ウエイトの重いところかと思えます。国では学習指導要領の中で学力について3つの定義を置いています。様々な視点から切り込んでいただき、本当の学力とは何かということや、三重県ではこれを踏まえてどう展開していくのかご議論いただきたいと思っています。

三重の子どもたちが自分の夢を実現できるように、三重の教職員がこれをバイブルとしてあるいは参考にしながら日々の教育活動が営めるよう、ご協力いただけますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

(事務局)

お手元の資料に沿って、教育振興ビジョン検討第2部会の設置趣旨及び審議内容について

て、事務局より説明をいたします。

(事務局)

資料1をご覧くださいませでしょうか。「教育振興ビジョン検討第2部会の設置趣旨及び審議内容について」でございます。最初に「部会」の設置趣旨というものがございませ。教育改革推進会議で、次期の教育振興ビジョンの策定について審議いただいております。その審議の深化・充実を図るため3つの部会を設置させていただきました。

審議内容ですが、3つの部会のうち、この第2部会は学力の育成に比重を置くテーマを審議することになっていませ。次期ビジョンの体系に「子どもたちに育みたい力」を掲げようとしていませが、その育成に向けて私たち大人は何ができるのかという視点に立って、主として学力関係の切り口から全体の方向性を検討していくということございませ。

審議テーマでは、包括テーマとして「学力の育成、学校の教育力」を掲げまして、ご覧の個別テーマとしていませ。この個別テーマは、今後の審議の進展の中でテーマを追加することも可能であるということをお願いしませ。

それから留意点を3つ掲げていませ。

留意点の1ですが、学力という言葉にも定義がございまして、ここにある から という意味で使っていきたいと思ひませ。

次に留意点の2ですが、教育改革推進会議で今、「子どもたちに育みたい力」を審議してありますが、これはまだ決まったものではありませんが、 の「学力」から の「三重を愛する心」まで、様々な「育みたい力」が取り上げられていませ。第2部会では、この中の 「学力」、「共に生きる力」、「自主性・自立する力」、「意欲、夢を見る力」に軸足を置いてご議論いただきたいと思ひませ。あくまでも「軸足をおく」ということであって、他の力と「切り分けて」審議するものではありません。

留意点の3ですが、第2部会の審議テーマの中には、学校や教員に関するテーマが含まれていませ。これらのテーマの場合には、「学力」のみならず、「心の教育」を踏まえた学校教育活動全般を視野においた審議が必要となり、少しテーマが広くなりますので、よろしくお願ひしませ。

5頁の資料の2には、三重県教育改革推進会議条例と三重県教育改革推進会議運営要綱を付けさせていただきます。

7頁の資料3には、「子どもたちに育みたい力」として、これまでの教育改革推進会議で出された意見を抜粋して(1)の「学力」から(9)の「三重を愛する心」までの9つに分類してありますので、参考までに見ていただけたらと思ひませ。

(事務局)

本日の出席者の皆様の紹介に移ります。13頁の資料4をご覧ください。それでは名簿順に簡単に自己紹介をお願いしませ。

(委員・部会委員自己紹介)

(事務局)

三重県小中学校長会副会長の鈴木一良様は、本日ご欠席という連絡をいただいております。

(事務局)

続きまして、事務局側の紹介をさせていただきます。

(職員紹介)

なおこの会議は公開で行います。ご承知おきくださいますようお願いいたします。

それでは、6頁の三重県教育改革推進会議運営要綱に則り当部会の部会長の選出をお願いしたいと思います。選任については、第3条第3項にもとづき「部会に部会長を置き、その部会に属する推進委員の互選によって定める。」とされています。事務局で原案を準備させていただいておりますが、提案させていただいてよろしいでしょうか。

(「異議なし」の発声あり。)

(事務局)

それでは、部会長には三重県高等学校長協会の川本健委員をお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

(「異議なし」の発声あり。)

(拍手)

(事務局)

それでは、部会長には三重県高等学校長協会の川本健委員をお願いいたします。川本部会長より一言ごあいさついただければと思います。

(部会長)

意識しておりますことは、委員同士の議論を活発にしていき、話をまとめていきたいということです。よろしくをお願いします。

(事務局)

以降の進行については、部会長よろしくをお願いします。

(部会長)

それでは6番目の審議事項に入らせていただきます。6番の(1)審議スケジュールについて、事務局より説明をお願いします。

(事務局)

それでは15頁の資料5をご覧くださいと思います。

審議のスケジュールについては、今回が「学力の育成」、次回が「教員の資質の向上」と「教員が働きやすい環境づくり」、3回目が「外国人児童生徒への対応」、4回目が「キャリア教育の充実」と「情報教育の推進」をご議論いただきたいと思いますと考えております。

この考え方は全体的なテーマや幅の広いテーマから先にご議論いただくということです。「学力」や「教員」など幅の広いテーマからご議論いただき、順次個別のテーマとさせていただきます。

「学力」や「教員」については、全体に関わるテーマであり、当該回だけではなく第2部会を貫くテーマとして審議するものしたいと思います。

第5回は、第4回までの審議の中で、積み残した課題や再審議、新たに加えるテーマ等があるかもしれませんが、そういった課題を審議するため、一旦空けておきたいと思います。

(部会長)

最初、副教育長から3つの部会の話があり、資料1にこの部会で審議しなくてはならないことが書いてありましたが、他の2つの部会について口頭で結構ですのでご説明をお願いします。

(事務局)

第1部会から第3部会までございまして、第1部会は、「特別支援教育」と「家庭・地域の教育力の向上」について議論いただいています。第3部会については、「豊かな心、健やかな体」といういわゆる「心の教育」でありますとか「いじめの問題」ですとか健康教育についてご議論いただくことになっています。

(部会長)

では今、提案のありました資料5について何かありませんでしょうか。ご意見がありましたらお願いします。

ないようでしたら、ここに書いていただいてあるスケジュールで進めていきたいと思っておりますのでよろしくをお願いします。

審議事項2番目の「学力の育成」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

それでは、17頁の資料6をご覧ください。上から3行目に少し線を引かせていただきましたが、まず、「学力の育成」にかかる包括的な審議をお願いできればと思っています。

論点は、四角で囲みましたように「子どもたちの『学力の育成』に向けて、今後10年先を見据え、三重県教育委員会として、どのような方向で取り組んでいくべきか」ということです。

補足説明として「視点」を4つ挙げさせていただきました。まず【視点1】ですが、「学力の育成」に関し、特に大切にすべき基本姿勢は何か。次に【視点2】といたしまして「少人数教育の推進」等の取組方向を今後とも堅持していくべきか。そして【視点3】として、今後の時代変化を見据え、「新たに追加すべき方針」、「特に注力すべき方針」等はあるのか。そして、【視点4】は少し具体的になりますが、他県には、学校教育法に規定される「学力」を踏まえながら、特に重点的に育成する力を加えて「県型学力」を再定義して取組を進めている県もございまして、こうした考え方を三重県も取り入れることは可能か、ということとございまして。このような視点で包括的にご議論いただけたらと思います。ちなみに今後10年先を見据えるにあたりまして重要となる最近の時代潮流については、18頁の(参考1)に主なところを掲げさせていただきましたので、ご覧ください。

資料7は、この後、別途説明いただきますが、資料8というのもございまして、少しだけご紹介申し上げますと、資料8は別冊でございまして。データ集でございまして、そのうち7頁以降は、後半の審議になります主体性・学習意欲に関するデータです。

1頁から6頁までは、全国の数値なのですが、学力と関連しているデータについて分析したものです。1頁目でしたら、「以下と回答している児童の方が、正答率が高い傾向が見られる」というような興味深いデータもございまして、参考までにお示しさせていただきました。

それでは、資料7の説明よろしくをお願いします。

(事務局)

「平成21年度全国学力・学習状況調査」の結果と今後の対応についてお話をさせていただきます。

まず、調査の概要でございまして、調査目的は、国や各教育委員会が調査に基づいて施策の見直しを行う、そして課題を発見して、解決を図る取組を行うというものです。各学校におきましては、児童生徒の学力や学習状況を把握して、教育指導とか授業の改善に役立てるといったものです。

対象は、小学校の6年生と中学校の3年生の全児童生徒、それと特別支援学校の小学部の6年生と中学部の3年生の該当児童生徒でございまして。

調査内容ですが、教科は国語、算数、数学でございまして、主として「知識」に関する問題、Aと呼んでいますがAの問題、それと主として「活用」に関するBの問題という内容で実施をされております。教科の他に生活習慣や学習環境に関する質問紙調査というものもございまして、児童生徒の学習意欲ですとか、学習方法ですとか、学習環境、生活状況でありますとか把握して、各学校でその指導等に活かしていけるようにしております。そういうものの一部が資料8のところに記載してあるものでございます。

本年度は4月21日に実施されました。

その結果でございますが、小学校については、全国と比べた傾向と申しますのが、グラフに表しますと、三重県と全国はほぼ同じような傾向になっております。全国でつまずきの多いところは三重県でもつまずきが多い。そして平均点がよく話題になりますので、平均点を見ていただきますと、全国と比べ、小学校では国語・算数ともに低いということです。中学校を見ていただきますと、全国と比べて国語は低く数学はほぼ同じという結果でございまして、1つ1つの問題についてどういった課題があったか現在分析を進めております。今後、各市町においても分析をしていただき、お示しをさせていただくといった取組を進めております。

なお、実施教科が国語、算数・数学の2教科のみであるということや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものではないこと、児童生徒が身につけるべき学力の一部分であるということにご留意いただく必要があるかと思っております。また、序列化とか過度の競争にならないよう十分配慮する必要があります。

今後の取組ということですが、学力の向上は、学校の本当に重要な役割でございまして。先ほど説明がありましたように、学校教育法に定められております「学力」とは、基礎的な知識・技能、そしてそれらを活用するための思考力や判断力、表現力等、それから主体的に学習する態度や意欲、そういうものであることを踏まえまして、文部科学省のいう「確かな学力」を学習指導要領に基づき、向上を図ることが私どもの基本的な姿勢だと思っております。そういった視点に立ち、学力・学習状況調査は1つの評価、つまずきをとらえることができたものと考えています。この調査を十分活かして、つまずきなどを把握し、そして分析をもとにした改善プランを作成し、市町の教育委員会と様々な面で連携して推進を図っていきたく思っております。3つめは、少人数教育の推進をはじめとする様々な事業を実施して、学力向上の取組を進めていくこととしております。また何かご質問があればお願いします。

(部会長)

ありがとうございました。ただいま資料の6・7・8の説明をいただいたわけですが、ご質問がありましたらお願いしたいと思います。

(委員)

県全体の学力・学習状況調査の小学校・中学校の正答率は記載いただいておりますが、分布図はどうなのかなと思います。わかっていれば教えてください。

(事務局)

資料は後ほど回させていただきますが、それぞれが独特の形をしております。特に数学Aは2極化とまではいきませんが、台形のような形になっております。普通は正規分布するというイメージがあると思うのですが、ダラっとした形といいたいまいしょうか、高得点の子も中間の子もあまり得点が取れなかった子も同じぐらいいるという独特の形をしています。それ以外のものについては、中心がありながら、横にずれたり真ん中にあったりという状況でございまして、母数がずいぶん多いものですからほとんど国と同じような状況です。国の方でよく順位付けが言われますが、ほぼ5%以内の差の中にすべての県が含まれておりますので、日本は世界でもまれ

にみる、どこの地域にいても学力がほぼ同程度の国と言ってもよい状況となっています。

(委員)

資料8のグラフの見方について教えてください。

(事務局)

相関関係を示しているグラフです。例えば、1頁の質問5「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがありますか」という問いには、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」、「どちらかといえば、あてはまらない」、「当てはまらない」の4つの選択肢がありますが、それぞれの選択をした子どもたちの平均正答率を表したグラフになっています。「当てはまる」と答えた場合の方が正答率が高いというのが分かるかと思います。

(委員)

「当てはまる」と回答した児童の正答率が72.1%で、「当てはまらない」と回答した児童の正答率が53.2%ということで、約20%の差があると読めばいいのですね。

(委員)

過去2年間大学教員として教えていてびっくりしたことがあります。何かというと、学生が考える力を持っていないなと感じることで、といますのは、他の大学の学生も同じような傾向かと思いますが、授業で何か考えさせようとしたときに、例えば教科書とかプリントを使って、便利な答えを引出そうとしたり、黒板に書いたものを写しとって試験のときそれを役立てようとしたり、そういう態度が目立つのです。「自分で物事を考えなさい」と言うと、どう考えたらいいのかわからない学生もいる。今回の資料を見せていただくと、学力・学習状況調査でも知識と活用と2つがあって、データから見ると中学生ぐらいになると、考える習慣もついていない、考える力が育成されていないと見て取ることができる。

もう一つ社会の大きな変化というと、企業も昔は、「あまり勉強せずに送り出してほしい」というニーズがありました。最近は企業が一定の即戦力を期待して、問題解決能力を發揮できる学生がほしいというニーズがあります。しかし、入学してくる学生を見ていると自分で考えたりすることが訓練されていないし、習慣もない。そんな彼らを4年間で育成するわけですが、出口である社会の方では、「自分で考えなさい」ということを言っていますし要請もしている。入り口にいる学生が、主体的に物事を考える力が下がってきている分、大学のほうに負荷がきているなと感じます。

もう少し大きく見ますと、経済とか社会とか考えた場合に、知識や知恵が社会を支える時代がきている中で、自分でものを考えて自分の意見を形成する、それを人に伝えて、他人の意見とすりあわせをしながら細かい結果を導き出していく、こういったことがこれから重視されてくるし、企業の側もそういった学生を求めている。大学も含めた学生を送り出す側の教員がそのニーズに応え切れていない。そういったことをこれからどうしていくのかということが、この部会で考えていくテーマじゃないのかなと感じています。

(委員)

今の意見と通じる部分があるのですが、いろいろな経験をした学生が非常に少ないと感じています。「知識」とか「知恵」とか言葉を使ってみえたのですが、私自身としては、「知識」がないと「知恵」という応用がきかないので、「知識」プラス「経験」が「知恵」になっていくのではないかなと思っています。そういった意味で、子どもたちに教育環境として整えてあげたいことは、教育現場を確固たる「知識」を身につける場にしていくことと、その土台となる「経

験」ができる場にしていくということです。またそこをうまく活用することで、「応用力」であったり、「問題解決能力」であったり、「想像力」であったり、一步踏み出す力が包括して「知恵」になっていくのではないかなと考えています。ですから「学力」という意味では「知識」をいかに効率的に身につけるかということが非常に大切だと思います。

また、今の学生は遊んでいる姿を見ても、ゲームソフトを買うときに、同時に攻略本も買う。買ってからパズルが完成するまでや、ゲームを攻略するまでにすごく時間がかかって楽しんでいた私たちの世代とは違って、まず解答を見ていかに早くできるかということを重視する学生が多いということは、すなわち「知恵」が薄くなっていることの表れかと思います。結果ではなくてプロセスを教えることで知識を身につける教育のプログラムが必要なのかなと思います。

参考になるかどうかわかりませんが、私が勤めている学校では、夏休みに社会体験実習というのをやっております。何をするのかというと、短大に入って半年ぐらいで、企業の方にご協力いただいて、社会に出て行く体験をする。社会に出ることで、いかに自分が半年間大学で学んだことが身につけていないかということも痛い思いで実感して帰ってきなさいと言っています。そして、学校には電話の応対やビジネス文書、来客応対とかを学ぶ講座もあるのですが、学んでいることと実際社会に出てできることとはこんなにギャップがあるのだということも体験して帰ってくる。そういう体験学習を2週間設けているのですが、やはりそれを履修している学生としていない学生とでは、後期からの成長ぶりが非常に違います。できることよりもできないことを体験してきた学生は、一周りも二周りも大きくなってきます。

(委員)

私どもの企業は毎年新卒で大学生を採用しておりますが、彼らを見ていますと、本当に大学を卒業してきたのかしらと思うようなことがあります。レポートなど手書きで書かせますと、漢字が書けないということもありますし、文章がなっていないようなこともあります。それと何か問題にぶつかったときに「自分の能力はここまで」と、最初から自分のキャパシティを決めてしまっているのですね。それ以上大きなものは自分にはできないと最初から諦めてしまって、投げ出してしまふ。そういう傾向が最近あるように思うのですね。

先ほどもおっしゃっていましたが、私どもは中小企業でありますし、そんなにたくさんの知識がなくてもいいのですね。専門分野でもありませんし。それより問題解決能力とかチームとしてみんなで成果を作り出していく、そういうスキルですとかチャレンジ精神ですとか、そういう能力のある人材を求めているわけなのですね。

そういった人材を育てていくにはどうしたらいいのかなといろいろ考えているわけなのですが、学ぶこととか、知ることが楽しいという、発想のできる子どもたちを育てられないのかなと思うのですね。私もこの歳になりまして、新しいことを学ぼうとすると、何だか結構楽しいのですね。例えば何かの文化教室に行き、まったく新しいことを学ぼうとすると結構楽しくてワクワクするのです。子どものときから学ばうことは楽しいのだと思わせるような、そういうことができたなら勉強にかかわらず、いろいろなことにチャレンジして、どんどん世界が広がっていくのではないかと思います。またそれを周りの大人がしっかり褒めてあげたり、認めてあげたりして、サポートすることが非常に大事なことかと思えます。

(委員)

私はまだ小さい子どももおりますので、子どもの目線に立って考えたときに、子どもたちは一生懸命意欲を出して勉強する年と、そうでない年があるのですね。先生によってかなり違ってくるということをすごく感じるのですね。「学校へ行くのが楽しい」という年と、「行っても勉強が全然わからんからもう塾へいかなかったら無理や」という年があるのですね。優秀な先生でも子どもの気持ちをわかって接する、そういうことが大切だと思います。「こうい

ったことが大切だから勉強しているのだよ」とちゃんと教えて、子どもも何のために勉強するかということが分かっているならば、すごく楽しんで取り組んでいくことができると思うのです。とにかく課題だけをどんどん与えて、何のために勉強しているのか分からない、それではなかなか難しい。僕らもそうなのですが、詰め込まれるとなかなか覚えようとしなないけど、「自分が生きるためにこうなのだ」と少し分かれば意欲がわいてくるのかなと思います。その辺はすごく子どもも敏感でよく言っています。

(委員)

伊勢神宮の橋の架け替えがありまして、そこでお茶会を今日からやっているのですが、その準備の段階で、私たちが高等学校・中学校にお茶を教えに行く機会が多いのです。高等学校になりますと茶道部というのがあって頻繁に行く機会があります。2日ほど前、その学校の先生の話聞いてびっくりしたのですがその先生が私になんとなし、「問題を解いている時に、答えを教えたってもよう書かんのさな」¹「いったい書く気があるんか、ないんかわからんけど、それが困る話なんさな」という話をされたのです。「このごろ、そういう子がある。陸上で県でもいいところにいつているのに。このごろの子どもらはわからんわ」とおっしゃるのです。確かに答えを教えてもらっても、いったいどこにどれを書いていいか分からなかったら、ほら書けないなと思いました。いったい何のための勉強なのかということが分からないから、それを小さいときに教えてもらってないから、結局、高校へ行っても大学へ行っても、自分が何をしなければあかんのか分からへんのとちがうのかなと思います。そやから、これから10年後の子どもたちの姿をしっかりと見据えてということであれば、「答えを書けない子を育てない」ということが一番かなとそのとき思いました。それがほんとに現実らしいですよ。

(部会長)

答えを求めてしまうとこまで落ちてしまっている。そこが問題や。さらにそれさえもできていないと。この学力・学習状況調査の中でも、初めから答えを書かない白紙みたいなことが話題になったということがあったと思います。お2人から、何のために学ぶのかということが大事だというお話がありました。

(委員)

大学でも専門分野ばかり教えているわけではなくて、一般的な科目も教えています。就職をするためにSPIといった試験がありますので、それこそ鶴亀算とかそういった、自分の記憶では中学校ぐらいのときにやったのではないかなという勉強をずっとフォローでやっています。学生は就職したいという思いがありますので、おそらく中学・高校のときより、真剣に授業に出てくると思うのですよね。私たちがボランティアでやっているそういった授業というのは、履修するものではないので、学生は自主的に参加してくるわけです。初めはびっくりするぐらい何もわからない。ひどい時には、「方程式って何？」って聞いてくることもあるのですが。そういった学生でも時間をかけてやっていると、データ集の相関関係に出ているように、最後までやったら、一問でもやったら達成感を持つのですよね。それで次の問題に進もうとするのです。そこでやっている学習というのは専門分野ではないく、学力の基本的なことをやっているのです。その方程式を解いたからといって、社会に役立つかということまではいっていないのですが、時間をかけて分からせることで、解けたという満足感で、来週も出てこようということになります。私もすごくやりがいがあるというか、ありがたいなと思っています。ただ、それを見て、高校とか中学校とかで、分からない問題を分からないと言えなかったのかなとか、分からない問題がとことん分かるまで学べる機会が果たして平等にあったのかなとか思いました。遊びたいとか、先生に聞くのが恥ずかしいとか、そういうことで知りたいのに、最後まで

到達せずに、放ってきてしまっただけじゃないかとすごく感じることもあります。やはり専門的な知識っていうのは会社に入って、後から学ばばいいと思うのですが、基礎的な学力っていうのは、とことん分かるまで教えてあげてほしい。義務教育と高校の段階で、そういう機会を十分確保していただけたらなと思います。

(委員)

先生の質よね。

(委員)

私は今の三重の子どもたちってそう悪くないだろうなと思います。三重の教員もそう悪くないと思いたい。

小学校、中学校の教育は、今、おっしゃったような視点で見直さないかんのではないかと思います。今、小学校、中学校の中で、じっくり考えるという時間を教員がどこで作っているのか。共同で作業をしたり、それぞれすりあわせしながら物事を発見したり、考えていくっていう場面を本当に作っているのか。卒業製作で「あなたは腕の部分ね」とか共同で作ることはありますが、ただ真理や真実を追い求めるということを時間かけて本当にやってきたんかどうか。「学ぶ喜び」より、「できない悔しさや恥ずかしさ」を教えていたのではないか。実は私も、「分からないことは、徹底的に分かるまでやる」という教育方針を持って教壇に立っていたことがあります。「できない子は放課後残りなさい」、「昼休みに来てください」という形で。ただ最後は罰ゲームみたいになっちゃって、おもしろくないのですよね。子どもたちは、そういった経験をうんとしてきました。ある子どもが昼休みに英語の単語を勉強しにきました。そうしたらその子が「私はなんで他の子と一緒に体育館に行けないの」と聞いてきました。僕も若いころですし、「だって、これできてないやない」と言いました。最悪ですよこの言葉。その言葉で、その子、学ぶ喜びとか学ぶ意欲とかずいぶん傷つけられたということがわかりました。最後はなんとか持ち直したと自分では思っているのですが。そんな営みをしてないだろうかというふうに、全教職員が見直していかなくてはならないのではないかな。かつて総合的な学習の時間というのが一斉に学校の中で議論されたことがあります。今はどっかへ置き忘れられておりますけれど、それはじっくり考えると、みんなで一緒のことやるとか、マニュアルではなくて自分の力で何か、みんなの力で何か引っ張ってきて見つけ出して、勉強していく喜びへもっていくというものでした。今、これがちょっと学校では薄れているのではないかな。できる、できないだけにとらわれているような気がしています。もちろんすべてではありませんが、最近の様子を見ていると、全体としてはなんとかがんばろうとしているのだけでも、特にそんな風に感じます。

(部会長)

教員の資質向上については、次回に予定しておりますので、具体的に先生方がどう教えているかについての話題なんかも、次回議論を深めたいと思います。一方で、三重の子どもは、全体としてはそんなに悪くないというお話でしたが、子どもたちの方を話していただけますか。

(委員)

ボランティア活動を一生懸命している子どもたちもいますしね。学校に来られない子どもに対して、「先生、私たちどうしたらええ」って多くの子どもたちが聞いてもきますし、担任の思惑を超えて自分たちで動いている子どもたちもたくさんいますし、競技スポーツでもがんばっていますし、学力の面でもがんばっている子はたくさんいます。ただそれぞれの欠点をつなぎ合わせてきたらそれはすごい子ども像になりますよね。勿論その欠点を、課題を「なんとかし

ていかなあかん」とは思います。皆さんの周りにお子さんってそんなに悪くないでしょ。

(委員)

義務教育の一番の目的、学力の一番最初に、基本的・基礎的な学習があって、どういうふう
に学力の保障をしていくかが課題です。脳科学的には、10歳ぐらいまでは、何回でも繰り返
して、たたき込んで覚えさせても、意味が分からなくて覚えさせても、意外と子どもたちは苦
にならずにドリルとか、音読とか古典でも覚えられるというすごい力があると聞いたことがあ
ります。10歳超えるとちょっと抽象的になっているんな感覚が高まるので、話し合いや問題
解決学習的な事を入れながら、系統的なカリキュラムや手法に重点を置く。すべての先生方に
そうしたことを知っていただき、今、ちょっとつらいかもわからんけどここを乗り越えたら分
かるとか、そういったものを培っていかなくてはならないのではないかと思います。

子どもにはそんな力がある。だけど、社会の流れやゲームに流されて、お父さん、お母さん
も仕事で忙しいし、先生方も忙しい。そこで、現行の学習指導要領の中で、どこにポイントを
おいて進めていくのか、どこで手法を変えていかなければいけないのか、もう一度見直してみ
ることが大事と思っています。

その中で、「視点2」にもありますが、少人数教育は、先生の目が行き届き、タイミング良く
声をかけたりできますし、子どもも助かっています。ここは三重県の大きな特徴じゃないかと
いうことで、さらにある学年にはもっと少人数教育を進めていただくとか、そういったシステ
ムになればなあと思っています。

(委員)

たまたま昨日、昼間ニュースを見ていたのですが、福井県の教育現場の様子がでていました。
なんで福井県の学力が高いのかなって興味があって見ていたのですが、塾とかへ行っている子
が少なく、ほとんどが学校で勉強しているって言っていました。中学校を取材していたので
すけれど、「じゃ何が違うのですか」と聞かれていて、先生の子どもさんに対する目配りと言っ
ていました。「猫の目」って言っていたかな。例えば、連絡帳ってありますよね。それに子ども
がびっしり、「今日はこんなことがあった」とか、「自分がどうしたこうした」とほんとに小さ
なことでも書くのですって。それを先生が一人ひとりきっちり見て、たっぷりお返事も書く。
「毎日それを繰り返しているだけですよ」って言っていましたね。三重県でもしていただい
ていると思いますし、そんなに変わったことしていないなと感じたのですけど。子どもにインタ
ビューしていたのですが、「いつも見守られている感じがする」って言っていたのですよね。中
学生も「いつも見守られていて安心感がある」って言っていました。心が安定すると学習意欲
につながっていくのだなと感じました。

保護者の立場でもあり、津の社会教育団体に登録している津家庭教育研究会の代表もしてい
るのですけど、「知」「情」「意」のバランスがとっても大切だと思います。三角形のピラミッド
型で一番底辺にくるのが「情」、真ん中が「意欲」、一番上が知識の「知」。子どもがお花を見て、
「とっても綺麗なお花ね」って言ったとき、教育ママだと「それはね、ゆり科の　だよ」っ
て知識を教えます。そうではなくて、その前に「綺麗だね」って共感してあげて、一緒に「情」
を育てていく。それから初めて「ゆり科の　だよ」って教えてあげると、「絵を描きたい」と
か「紙に書きたい」とか意欲が育ってきます。保護者としては「情」をたっぷり幼児期に育て
てあげたいなと、たくさんの経験をさせてあげたいなと思います。最近脳科学の方からも知識
のことが言われていますけど、しっかり体験もさせたいと思います。木でいうと根っこの部分
が幼児期になるのですよね。思春期になってから「さあ勉強しろ」じゃなくて、小さいうちか
らの土台作りが大切で、そうしてやっと花の実もなるのではないかと思います。根っこの部分
が大事で、そして小学校、中学校は、細い木に育てるのではなくて、大木に育つように、その

根っこの部分も大きく育てなくちゃいけないと思います。学んでそんなことじゃないかなと。

(委員)

最初に、これだけは考えておきたいなと思っていることは、今は基礎学力、基礎的な知識・技能だけではダメで、思考力とか問題解決力とかですね、そういうのを併せた学力を学校の中でしっかりつけてほしいということです。そのような教育がなんとかできないかというふうに思っているのですよ。三重県は塾に行っている生徒がかなり多いというふうに聞いていて、学生の話聞いても、ほとんど塾に行っているのですよね。そうすると、学校で勉強して、塾に行くと、結局、本当の意味で自分の頭を使って勉強する時間ってないのですよね。ですから最初の方で出ていた「自分で考える力」がどうも育っていないというのは、そういう時間がうまく作れていないからではないかと思うわけです。なるべく「塾に行かなくても、三重県の学校では、基礎学力、思考力、問題解決力の基礎みたいなことが身に付く」というふうなことをなんとかできないかと思っているのが1つです。

ただ、今の小学校、中学校とかでは、現場の先生たちが実は苦勞している。昨日も実践研究会をやったのですが、やっぱり、授業が成り立つクラス環境を作るのにまず先生たちは大変苦勞をされていて、はみだしてしまうような子をフォローしながら、「安心してこのクラスでいられるよ」みたいな、そういった雰囲気ができないとなかなか学級が進んでいかないということがあります。お互いを受け入れるとか、あるいはコミュニケーションとか、そういった力をもう一方で大事に作っていかなくてはいけないのではないかなと思います。

あと学生の姿を見ていて思うのは、先ほどの問題解決力と関係してくるのですが、私はちょうど20年ぐらい前から大学の教員を始めたのですが、その時は最初短大で、まだそのころの学生さんっていうのは、こちらが熱心に話をすると、話を聞いてくれたのですよね。ところが今大学に変わりましたが、そういう人の話を聞こうかなっていう感覚が、本当になくなってしまったというか、なかなか話を聞いてくれないのですね。それよりも「自分たちだけで少人数でやったら」って言ったほうが、俄然生き生きするっていう状況がある。今の子どもたちって、自分の話を相手に丁寧に聴き取ってもらって安心するっていうようなことを、あんまり経験できていないのかなと、だからそういう関係を作っていかなくてはいけないなと思うところです。もう一方で、今は問題解決力っていいですか、自分で考えて、お互いが考えあって解決していくような問題解決の方が若者には合っている、何かを暗記しなさいというよりは、人の話を聞きなさいというよりは、合っているのかなと思って、そういう意味で問題解決的な学習をやれたらいいのではないかなと思います。

それからもう一つ、例えば少人数教育とか本当に必要だし、「視点4」にあるように「県型学力」というかどうかは分からないけど、私はもっと若者に社会に参加をしてほしいと願っていますので、社会参加とか問題解決とかそういう学力を特に三重県では付けていこうというふうに皆さんが一致できるなら、そこらへんを強調した学力を打ち出してもいいのではないかなと思っています。

(部会長)

私も一つ思っておりますのは、「学力」は個人の学力、生徒一人ひとりの学力っていうのと、それから三重県全体の子どもの学力というのと、2つあるということです。分けてしまっただけではないのですが、私自身は、高等学校の校長だからよけいそうかもしれませんが、全体を見てしまうわけですね。しかしながら、子どもたちと普段しゃべっていたり会ったりして顔を合わせていると、一人ひとりの学力のことも気になるわけです。このあたり、ビジョンの中でも、三重県全体の総論だけで終わらず、学校のことに踏み込めないかなと思っています。

(山口副教育長)

学力というのは、普遍的なものですかね。例えば義務教育の学力と高校の学力あるいは大学の学力っていうのは違うのですかね。

例えば先ほど言われたように課題解決能力なり、実社会の中でそういうところが求められている。即戦力になるような人を企業は求め始めている。義務教育では基礎基本をしっかりやってきていますね。その上に乗っかっていう話に多分なるのだろうとは思っているのですが、そのあたり、発達段階ごとにつける力というのは違うのでしょうかね。

(部会長)

それは先ほど言われた「三重県型」と頭に冠したようなものにするとしたら、その議論になってくる。皆さんの議論がどんどん進んでいけば、「三重県型学力」というものが、ここで形づくられるのかなと思っているのですが。あえてそれを目指して議論をしようとは、私は思っていないのですが。

(委員)

いわゆる出口にあたる社会の方で、課題解決とか問題解決とかいろんな粘り強さとかが求められています。今、大きな経済団体もいわゆる人間力とかを出したり、もう一方では、OECDでもコンピテンシーとか、多様な能力といいたまうか、そういうことが求められている。ただ、昔のように基礎的な知識や技能を身につけて、それを基礎にすればそういった能力もつくよといった時代ではないのだろうと思うのです。それも必要だけど、そういう問題解決能力なんかを身につける、独自の学力の修得方法をやっていかないと無理なんかじゃないかと。大きなネックは、大学入試ですよね。大学入試がああいう形になっている限り、どうしても知識中心の学力っていうのがより表に出ちゃうっていうのがありますよね。

(部会長)

今のは宿題ということで、ここで休憩をいれまして、後半の話も今までのことの続きになるかもしれませんが、資料説明のあと議論を続けていきたいと思えます。

(14時20分休憩)

(14時30分再開)

(部会長)

それでは、会議を再開させていただく前に、お出しいただいた学力・学習状況調査のグラフについて、事務局よりご説明をお願いします。

(事務局)

ご質問のありました資料のグラフでございます。それぞれ独特の形をしています。話題になっていました中学校の数学のグラフはA・Bともに独特の形になっています。二こぶにはなっていないのですが。平均より上下というだけではなく、こういう分布状態であるということです。中学校までいくと、すごく正答する子もいるし、なかなかできない子も同じほどいるということ把握していただけるのではないかと思います。知識の部分につきましても、活用の部分につきましても、同じような傾向にあります。

(委員)

小学校6年生と中学校3年生ではえらい違いですね。

(部会長)

まだ、資料 8、資料 9、資料 10 が残っていますので、説明をお願いします。

(事務局)

資料説明の前に事務局からのお願いですが、この学力の包括的な議論はずっと引き続いていくものですので、今の視点を思い出していただいて、随時またご意見いただくということをお願いいたします。

では、資料 9 を見ていただけますでしょうか。資料の 23 頁です。今度は、学力の中でも特に、主体性とか学習意欲に関することを掘り下げてご議論いただきたいと思います。資料が少し長いので、拾い読みでご説明させていただきます。

まず 23 頁の最初に現在行っている取組を列挙してあります。簡単に申し上げますと、「(1) 主体性を育む学校教育」ということで、児童生徒の主体性を育むため、児童生徒の興味・関心に基づく体験的な学習や、問題解決的な学習等を創意工夫して展開しています。それから次の 24 頁、「(2) 選択幅の拡大」ですが、特に高等学校のことが書いてありますけど、専門学科の学科改編や総合学科の設置、単位制の導入、特色あるコースの設置などしまして、生徒の選択幅が拡大するように取り組んでいます。「(3) 子どものよさを伸ばす指導」では、例えばには少人数指導やチームティーチング等、一人ひとりに応じたきめ細かな教育、には幼・小・中・県立学校間の連携を密にして取り組んでいること、には総合的な学習の時間において創意工夫しているといったことがあります。具体的な取組として、現在、「幼保小中育ちのりレー事業」にも力をいれておりますし、高等学校では、習熟度別学級編成ですとか、学級編成を少人数ですとか、社会人講師に来ていただくとかの取組もやっております。「(4) 評価について」ですけど、10 年前のビジョン策定時は、相対評価を行っていましたが、人と比べてどうかとか、そういう評価をしては良くないのではないかという議論もございまして、絶対評価、目標に準拠した評価に改めていっています。「(5) 通学区域」につきましても、学校を選択肢が広がるという趣旨がありまして、小中学校では、学校選択制を実施したり、弾力的な運用を行ったり、あるいは高等学校におきましては、現在 3 学区なのですが、隣の学区へも志願できるように弾力化したりしています。「(6) 入学者選抜制度」ですけど、平成 20 年度の入学者選抜から、前期選抜と後期選抜による入学者選抜を行っておりまして、生徒の受検機会が拡大しております。にありますように、中高一貫教育についても、県内 4 地域で展開をさせていただいています。

これが現在の取組なのですが、26、27 頁には、問題点を書かせていただきました。(1) は子どもたちの現状にかかる問題点です。先ほどの学力・学習状況調査の説明では、正答率の話がされておりましたけど、学習意欲に関する様々な質問項目でも、三重県の子どもたちは全国平均を若干下回っている傾向にあります。それは資料 8 から読み取っていただけたと思います。それと、難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦するとか、将来の夢や希望をもっている子の割合というのが、小学校から中学校になるにつれて減少してしまうというところが若干問題点として見受けられます。それから (2) は、私たち教育委員会としての取組に関する問題点です。私たちは、この部会と並行してワーキングを行っておりまして、その庁内ワーキングで出た意見をそのままここに出ささせていただきました。多かった意見は、組織全体としての問題点のところにある意見です。「何のために勉強するのか」という根本的な指導の有り方についての組織的な対応が十分とは言えず、個々の教員の力に依存している状況であるとか、教員自体にやらされ感があるために、生徒にもおもしろさが伝えきれていないのではないかということです。それからいろんな取組は主体性を発揮するために実施しているのですが、

のところその取組に内在する問題点を書かせてもらいました。例えば選択幅を拡大していますが、これは子どもたちが意図や目的を持って選択してこそ意味があるのに、それが何もわ

からないままに選択してしまうということで、その選択のための土壌づくりが前段で必要なんじゃないかという意見がございました。あるいは体験学習にも取り組んでいるんですけど、その目的が十分共有されていないのではないかという意見などもございました。(3)は社会風潮にかかる問題点もあるのではないかということでございまして、一つは今の社会の風潮として、リーダーとか突出した者の足を引っ張る傾向があるのではないかと、例えば良い成績を取った者や率先して行動したものがいじめの対象になるといった傾向もあるということも意見として出ていました。これはすべてのところがそうとは言えないと思いますが。それから次にありますように、今の時代は学校での努力が夢に直結するとは限らないので、子どもたちが明るい展望を得にくいという意見もありました。

じゃ、こうした社会状況の中でどのように意欲を育てていくのかというのが問題になるのですが、28頁・29頁に切り口を3つ掲げさせていただきましたので、ぜひ意見をいただけたらと思います。まず1つは、この主体性・学習意欲の育成に関して、阻害となっている要因はなんだろうかという点でございまして。参考までに10年前に行われた現行のビジョンの審議会の中では、例えば、受験戦争が過熱化する中で、詰め込み教育が行われ過ぎたのではないかと、不本意入学を強いられている子がまだ多いのではないかと、授業の進度を意識するあまり、好奇心を育む機会が少ないとかいう意見がありましたので紹介させていただきます。その後10年を経て、これがどのように変わってきているのかというような視点を考えていただければと思います。

それから2つ目の切り口として、ではその阻害要因を除去していくにはどうしたらいいのかということ。「視点1」にも書きましたように、仕組みやシステムの改善から雰囲気づくりからあらゆる視点で考えていただけないかと。それから「視点2」として、私どもの庁内ワーキングで一番話題になっていました「何のために勉強するのか」という根本的な指導ってどうしていったらいいのかという問題について、ご意見をいただけたらありがたいなと思います。

最後の(3)ですけども、今やっています主体性を育む取組が一層効果を発揮するためにさらなる工夫改善をどのようにすればいいのかということでございまして。例えば高等学校の特色化・魅力化とか評価の仕組みの改善とか、通学区域の弾力化とか入学者選抜とか中高一貫教育とかやっていますが、これをさらに良くするにはどうするか。あるいはやめた方がいいのではという意見もありえるのかなとは思いますが、ご議論いただけたらと思います。

(部会長)

資料10はいいのですか。

(事務局)

資料10を簡単に申し上げますと、今の現行のビジョンには31本の柱がありますが、その中で、今日の議題であります主体性・学習意欲の育成に関連の深い5本の柱を選びまして、その5本の柱について、どのように取り組んできて、どんな課題があるのかということ、参考までに示させていただいたものです。私どもが5、6月ごろに自分たちで検証を行いました。

(部会長)

今日の前半の議論からさらに具体的な視点を提示していただいたと思います。今の資料も見ながら、子どもの主体性・学習意欲というところに重点をおいて、学力の育成についてご議論いただければと思います。

(委員)

学校の先生方が「何のために勉強するのか」ということをどのように教えてみえるのか、知

りたいのですが。

(委員)

どこかで申し上げないといかんと思っていたのですが、現行の教育振興ビジョンには入学者選抜制度の廃止も含めた見直しというのが書いてあります。それが何で出てきたか。当時の記憶を蘇らせて、今の実態を考えてみると、「入試を学習の動機にあまりにもしすぎているのではないか」ということやったと思います。そういう動機付けをしているのではないかと。「勉強したらこんなことができるよ」という言葉より、「勉強しないとこうなっちゃうよ」というふうな指導が一面あるのではないかなというふうなところは私、率直に感じています。このワーキンググループの中でもおそらく、そういったことを踏まえながら「学ぶ意欲をどういうふうにするか」というところで議論されている。前回の現行のビジョンの時に、出された課題がこの10年、11年の中で克服されてない。入試が学習の動機付けの実態として大きな要素を占めている、そういうところはやはり課題になるのではないかなと私自身は思います。

ところで皆さん方は、「なぜ勉強しなくてはならないか、何のために学ぶのか」ということをどう教えてきましたか。

(委員)

校長先生をはじめ、先生方は、子どもたちに「何のために勉強するか」をどう指導するかについて、職員会議で話し合われたことがあるのですか。

(委員)

自分の経験では、今まで職員会議でそういった「なぜ勉強するのだ」ということを話し合った記憶はあまりないですね。若いときには、私も中学校の現場にいて、入試というものを勉強の理由に、高校がゴールになるような学びの狭さでやっていたときもあったのですが、今は、子どもたちに「いろんなことを勉強しないと、自分のいいところ、自分の個性がどこにあるかも分からない」という言い方をします。高校へ行っても、社会へ行っても、一生、勉強していくのはついていくものだ。先生としてそういうことを議論したことはないので、中学生になればそういうことを一度話し合うっていうのもいいことじゃないかなと思います。親御さんもそうですけどね。

(部会長)

高校でも、そういうことを話し合うっていうことはないですね。私は3つの高等学校で校長をしています。基本的には、勉強をするために学校に来ているのだという前提があるのです。子どもたちは学校へ来たなら勉強するという前提がある。実際はしない子もいっぱいいるのですけどね。目的は何かということは、個人の問題に落としてしまっている。「生徒それぞれが自分の目的でやってもらったらいいのであって、当然学びたいから学校へ来ている。それを我々が教えている」。そんな感覚が私も含めた職員の中にはあるのでしょうかね。

現実には目標がなかなか見つからない生徒もいます。そういったときは外部の人を講師に招いてきて、元気づけるような話をしてもらったりする。実際、個々の教室の中ではがんばっている教員もいるかもしれないのですが、全体としては教員自身よりも外の力を借りてやっていることが多々あるのではないかと考えています。

(委員)

授業の中で子どもに意欲をつけるっていうのは土台なのですが、先ほどおっしゃってましたけど、先生によって違うというところがあります。ですから、それにプラスですね、外部の方

というか地域で一生懸命何かをやられてきた方の生き方についてお聞きしたりするのが良いのではないかと思います。鈴鹿といえば伊勢型紙とか、あるいは身近な人の生き方とかをお話してもらおうと、子どもたちも、それでそのおじさんの今の姿があるというようなことを感じる。ですから、先生の話だけじゃなくて、こういう地域の人、外部の人のお話を聞くということは非常に大事じゃないのかなと近年感じています。

(部会長)

実際に県立学校のコミュニティスクールの活動の中では、こういう主体性を育むとか、学習意欲を伸ばすとかについては、どう考えておられますか。

(委 員)

正直なところ、高校の特色化とか魅力化とかそういったところで、2年間ずいぶん悩んできているのですが、これとって具体的に何をしたら良いかっていうことは、まだ見つかっていないのが実情です。

逆に言えば、県教委には言いたいことがあるのですが、いろいろ、「こういうことができたら子どもたちがたくさん集まって楽しんでできるのではないか」とか提案しても、「それは無理です」とか言われてしまう。他の委員さんからも、「じゃどうして特色化を出したらいいのですか」ということで、「いろいろ提案しても無理やな。すべてだめやな」というふうに思われるのですよ。確かにいろいろやろうと思ったら予算もからんできますし、人事の方も難しいということも分かるのですが、子どもたちにとってほんとに魅力のある学校にするために、これぐらいなんとか協力してもらえへんのかなと思うところはあるのです。自分たちでお金をかけずにできることを悩んでしているのですが、良い方法があったら逆に教えてほしいぐらいです。

東京の子も福井の子も三重の子も一人ひとりが持っている能力はそんなに差はないと思うのですよ。全体の環境であったり、そういったところで差がついてくる。学力面では、全体のレベルからちょっと落ちているぐらいやったら、僕はあまりとらわれずに、それはそれでいいと思う。それよりも、仕事についた時に、三重の子どもたちはすごくヤル気があって生き生きとしているねって言われるように、問題に出会ったときにそれを解決する力とかそういったところをなんとか伸ばすような教育ができないのかな。だから、三重県の子どもたちが願書出してきたら企業の方が優先して採りたいなと、三重の子どもたちはそのへんが違うなと思ってくれるような教育をもっともっとアピールして、やっていくべきなんかなという気がするのですよ。特に、子どもたち個々の意見を尊重して、意見をどんどん出す力をつけさせるようなことができたなら、人間関係のことで変わってきますし、すごくいい方向にいくのではないかなと思うのです。そこらへんをやっていくと、自然と学力も上がってきたりとか、変わってくるような気がするのです。それを具体的にどうするのかということは難しいのですが。

ちょうどこの前、桑名出身の大島君、「てっぺん」という居酒屋をやっている人で、多分みなさんも知っていると思うのですが、2日前に会って話をしたのですが、すごく参考になったことがあります。親や先生への尊敬という点では、世界でも一番レベルが低いというぐらい日本の子どもたちは親や先生に対しても尊敬をしていないということで、どういうしたら変えられるのかなということについていろいろ話をしたのですよ。やっぱり、学校の教育現場から子どもたちがどんどん夢を持てるような教育をしていったら、いじめもなくなるし、学習意欲もわいてくるっていうことでした。大島さんは、自分たちは世界一になるのだっていう想いを尊重してやっている人で、すばらしいなと思って聞いたのです。親みたいになりたい、ああいう仕事かしたいっていう形になってくると、すごく子どもたちの力がわいてくるのかなという気がします。

(部会長)

先ほど「大学入試がある限り」って言われた意見や、別の方が言われた「入試が学習の動機」という話とくっつくなと思ったのですけど。

(委 員)

今おっしゃったことにすごく共感して聞いておりました。主体性・学習意欲の向上に向けて、学校や教育委員会をどうしていくかが課題になっているわけですけど、先生方のお話を聞いていると、「なぜ学ぶのか」というのは、どうも教えられるものではないみたいな印象を受けます。何かの指導はできるのかもしれませんが、たぶん、一人ひとり「なぜ学ぶのか」ということは違うと思うのです。学ぶ意欲を引出すということは大切なのですが、教えたりすることとはなじまないのではないかなというふうに感じます。

そんな中で、主体性・学ぶ意欲を考えた場合に、資料9の23頁に書いていただいていることが非常に重要ではないのかなと思うのですが、1行目から2行目のところに、「閉塞的な社会状況のもとで将来の夢や目標が描きにくくなり、そのために学ぶ意欲がなくなっている」ということが書かれています。学校教育があり、義務教育、「教育を受ける権利」として重要視しているということは、学ぶということが人生のうえで非常に重要な意味を持っている、つまり「よりよい人生を送るためには、学ぶことが必要なのだ」という確信が根底にあると思います。やはりそのことをどう伝えるかということ。これから子どもたちが一人ひとり人生を送るために、よりよい人生のために学ぶことは重要なのだと。

もう一つ、「学ぶ」というのは、学校の勉強だけに限らないのではないかと思います。先ほど入試の話も出ましたけど、入試はどうしても学校で学んだことしか出ませんから、「学ぶ」ということを狭くしてしまう。たぶん、「学ぶ」ということはそれ以上のことがあるのでしょ。義務教育の9年間の中でも、学校の中だけでは学べないいろんなものがあるのだらうということ。外に出る「総合的な学習の時間」とかが出てきたのだらうと思うわけです。そういう部分をどうするのか、そういうことも含めて、考えなきゃいけないのではないかなと思います。

そう考えてきたときに、最初に私は「出口」、つまり企業側や社会の側の話をしたのですが、なぜ学ぶのかということからいくと、「出口」の要請に応えるためだけではなくて、もうひとつあるのだらうと思います。それは「よりよい社会を作っていくためには、社会を構成する人たちに学んでもらわなければならない。そうでないとより良い社会にはならない」ということです。「今現にある社会がこうゆう様相をしているからこう学びなさい」というのは、子どもたちにとっては当然受け入れられないのだらうなと思います。だけど現実としては、「将来いい職業につくためにいい大学にいかなくてはいけない、そのために勉強しなさい」という具合に子どもにおっしゃるご家庭が多いのだらうなと思うのです。たぶんそれが違うのだらう、本来ちがうのだらう。実際に、大学に勤めさせていただいて、実感として思うのですが、例えば会社は明らかに学力で選別しなくなってきていますね。学力試験がいい学生よりも面接したときにきちんと自分のやりたいことが伝えられる学生が欲しいという時代です。「よりよい人生とはよりよい会社に入ること、よりよい大学に入ること」という具合に、子どもたちに伝えているとすれば問題があるのです。そうすると結局、よりよい人生とはどういうことなのか、そこをどう伝えるかということが大事になってきます。

次に教育のサービスを提供する側で考えなきゃいけないことは、もう1点あります。23頁に「子どもたちは物質的には満たされているものの」とありますが、これは子どもたちだけでなく、社会全体が物質的には結構満たされていて、「物から心へ」と言われている状況になってきている。「クオリティ・オブ・ライフ」が行政の中の大きな目標になってきていると言われ

ています。人生の質とか生活の質、人生を価値あるものにするという要請が大きな社会的な目標になってきている。ライフっていうのは一人ひとりのものですね。一人ひとりがよりよい人生を送れるような社会にしなくてはいけないということが行政的な目標になってきているわけです。1990年代から行革論なんかの本でもそんなことが言われています。「子どもたちの人生を価値あるものにするために教育はある」ということではないのかなと考えます。そんなことをなぜ申し上げたかという、今度の教育振興ビジョンで「学力」をどうとらえるかということと非常に関係してくると思うからです。そのようなとらえ方が適切ではないかと思います。

(委員)

人間本来の究極に求めるところというのは、幸せな人生を送るっていうことだと思うのですね。それも自分だけが幸せじゃなくて、周り全体、みんなで幸せになるっていうことが一番大事な部分かなと思うのですけど。

じゃあ幸せってどういうことかっていうと、自分自身が1年前と比べてこれだけ成長したなという実感が得られることですか、周りの人から認めてもらうことですか、人のお役に立てて、その人が喜んでくれたことが、自分も喜びであるというふうに思えることですか、そういうことが志を高くするっていうか、自分を磨いていくとか、幸せに繋がっていくことかなというふうに思うのです。

今おっしゃったご意見に非常に共感するところがあるのですが、例えば、今、入試がちょっと悪みたいな捉え方をされている部分があるのですけど、じゃ入試が何のためにあるのかということなのですね。人を蹴落として、自分がいい成績をとって、いい会社に入るっていうのが入試の目的じゃなくて、入試を乗り越えることによって、自分自身を磨いて、人のお役に立てる自分になって、社会全体の一員となって、幸せになっていくというか、そういうためにあると。少し抽象的になってしまうのですけど、一段と高いところにビジョンを置いてみると、全体的に分かってくるように思うのですね。「何のために学ぶか」ですとか、「どういう教育をしなくてはいけない」とか、そういうのがちょっと見えてくるのではないかなと思うのです。

(委員)

今のお2人のおっしゃることは良くわかりますし、多分学ぶ目的を学びの外に置いた途端に、ややこしい話になるのだろうなと思います。「これができたらこうなるよ」とか、「これができなかったらこんなことになっちゃうよ」とか、というようなやり方はもう通用しないのだろうなと思っています。かつて日本がまだまだ可能性のあった時代には、高偏差値・高成績・高学歴・高収入、そして自分の人生の幸せ、そういうものを子どもたちに一つの線として示せました。今の子どもたちにそれを言ったって、騙されるわけがない。世の中本当に不確定ですし、今の企業の要請が5年後、10年後、同じような要請なのかもわからない。5年先、10年先の社会がどんな社会かもわからない。ただおそらく変わらないのは、「学ぶっていうことは楽しいことですよ」、「それは生きることに繋がりますよ」ということ。青臭いけれど、ここに立ち戻って教育を組み立てていかなければいけないのやないかと感じます。楽しいってそんなにゲラゲラ笑いながらやないけど、「昨日より今日、今日より明日と良くなっていく、そのためには学ぶことは大事ですよ」、そして「学ぶこと自体が楽しいことなのですよ」、というのを私は最終的に子どもたちに言うて、教員の籍を離れたのです。そういうところに立って、三重の教育を考えていく必要があるのではないかなと思います。

(委員)

基本的に学ぶこと自体が楽しいという経験がとても大事だと思うのですよね。特に小さいこ

ろに、小学生とかできれば中学生でも、学ぶことは楽しいっていう原経験をぜひさせたいなと思います。そのことが学習意欲に繋がっていくというふうに思うのですよね。

といっても私はそれだけではなくて、何人の方々もおっしゃったと思うのですが、何で学ぶのだとかは、生徒自身が自分なりに見出していかななくてはならない部分があるのですが、そういうことを見出していく手助けをなんとか学校とかで支援できたらいいと思うのですね。そういう意味では、例えば、体験学習とかキャリア教育とかいろんなことがあると思うのですが、私が一番気になっているのが、今若者が自分なりにどう生きようとかどう学ぼうとかを考えるとときに、自分たちで企画したり、考えたり、行動したり、自分で責任をとるみたいなそういう経験があまりなくて、結局いつも守られているということです。

ついつい私は昔の子育てのことを思い出すのですが、明治時代の初めごろの子育ては、例えば、青年組とか若者組とかに入れて、どういう風に育てたかという、いろんな行事なんかの時に、「お前たちは一人前の内に入れてやるから、一人前に仕事しろよ」というふうにやって、ただ本当に成人していないときは、「最後はちょっと責任を持たせないよ」と。本気で一人前に仕事させるのだけど、なんか失敗しても責任を取らせるっていうことはあまりしないというような形で大人に育てていくというシステムを持っていました。今は、学校の中でトラブルがあるとみんな問題になっちゃうから難しいのだけど、なんとか中学生や高校生ぐらいになったら、自分たちでちゃんと企画して、何かをやって、自分たちの力でこれだけやったなというような経験をいろいろな形で社会的にしていく、社会体験をするような取組をやっていくと少し違うかなと感じます。今の体験学習っていうのは、まだ枠の中でやられている感じがして、もう一歩なんかやれないかなと、抜け出せないかなと、こういう中で、若者が元気になるような取組ができないだろうかあとちょっと考えているのですけど。

(委員)

市橋容疑者の事件を見ていて思うのは、彼は千葉大の出身ですよ。やはり知識だけではだめで、学んだことを必要なときに引っ張ってこられる力を育てていくことが大切っていうか、「優等生の役立たず」ではいけないのだなと思いました。子どもは、23歳と19歳の大学生と高校生と小学校の6年生の4人なのですが、何のために勉強するのかっていうことについては、「将来あなたたちの役に立てるために、勉強するのだよ」ってことは言っています。

それと、主体性とか学習意欲とかについては、子どもたちをこんなふうにしたいとかいう以前に、自分たち大人が見本となるようなことをしていかなきゃいけないのではないかと思います。大人がしっかりと自分を育てる「育自」をしていく。子どもたちは大人の後姿を見て育っていくと思うので、主体性や学習意欲を育む姿勢を大人たちが見せるっていうことも大事なかなと思って皆さんのお話を聞いていました。

(委員)

三重県各地で県民懇談会が始まりますよね。もう始まっているのかな。

(事務局)

はい、もうすでに伊賀から始まっています。

(委員)

私は、県民の皆さんがこの質問にどう答えるのか聞きたいです。

(事務局)

「何のために勉強するのか」ということについてですか？

(委員)

そうそう。そこには、いろいろな社会的な立場の方がみえると思うのです。

実際親の責任ってすごく重いと思うのです。先生を育てるのも親ですし、その先生を育てる親がどのように考えているのかなど。いろいろあると思うので、その皆さんがどのように答えるのか聞きたいなと思います。無理ですかね。

(事務局)

いえいえ。すでに資料等は発送していて、テーマ設定はしてあるのですが、進行役の委員の方で何とか対応いただけますか。

(委員)

「何のために学んできましたか」という聞き方でいいですか。

(委員)

聞いてみてください。

(委員)

「何のために学んできましたか」というのはある意味、その人が子どもであった時代に、学校や社会がどんな働きかけをしたかというのが見えてきますから、おもしろいかもかもしれません。

(委員)

私は、先生をいじめるようなこと言うてましたけど、親の問題でもあると思うのですよ。やはり先生と親御さんが一体となり子どもたちをどう育てましようとする、そういう舞台が要る。先生の一方的な意見でもいかんし、親が「先生はなんもしてくれへん」ということになってもだめで、やはり親と先生と一緒にあったところで、喧々諤々の議論になってもいいので、こういった話し合いつて必要だと思います。おばあさんも入れてね。私自身は子どもに勉強しやなあかんでいうのは、「おつりをもらうときに間違えたらいかんから勉強しなさい」という教え方をしましたね。そういう単純なことでした。

(委員)

僕らが学校へ行っていた頃は、そういったことを考えて学んだことは、1回もなかったです。高校へもただ行っておいたらいいっていう感じでした。そう思えば、今の教育って一生懸命、先生方も努力して高校へ行ったら進路のこととか説明しながらよくやってくれているのだから感じはするのです。やっぱり親が環境を悪くしてしまったのだらうなと思います。昔は子どもが悪かったら先生がきちんと怒ってくれたけど、今は環境が悪くなってしまって、学校も「やり方が悪いどうのこうの」とって評価されるので大変ですね。今の子どもたちはどうのこうのというけど、もしかしたら子どもも大人もかなりレベルが上がっているのかもしれない。恥ずかしながら僕らのときはさっぱりでしたので。

(委員)

26頁に「教員自体にやらされ感がある」とありますが、これはどういうことかなと思って、ちょっとお聞きしたいな。

(事務局)

庁内ワーキングの意見ですので、全部の教員がこうだと言っているわけではないんですけど、

その時にあった指摘は、最近あれやこれやといろんな教育ニーズが増えてきて、教員が大変多忙化している。その中でやらされ感、どうも教育委員会から押しつけられたような感覚があって、授業をしている先生方自身が楽しんでいない。先生の楽しんでいない気持ちが、子どもにまで波及して、子ども自体が楽しめていないのではないか。そういう意見でした。それはある程度の数の方の方が言われていました。

(委員)

授業自体にやらされ感があるっていうよりは、教員としての仕事全体が忙しくなっているということなのですかね。

(副教育長)

それもあると思いますが、好きな授業の組立ができないとか、そういうことなのでしょうね。環境教育をやりなさいとか、消費者教育をやりなさいとか、食育をやりなさいとか、福祉教育をやりなさいとか、いろいろ次から次へと県庁の各部局からいっぱいおりてくるわけです。その中で学校は選択するわけですが、例えばその先生は、平和教育をやりたいと思っているかもわからない。そうして、やらなければいけないこととやりたいことがミスマッチをおこしているのではないか。それでやらされ感となってくるそういう意見です。

(委員)

もう10年ぐらい前になるのですが、初めて小学校のPTA会長になった時、気になったことがありました。その時、子どもたちの意欲を引き出す天才みたいな先生がおって、一生懸命やってくれて、子どもたちは本当に生き生きやっていたのですが、ただその先生がそのうちだんだん元気がなくなってきて、やせてもくるし、どうしたんかなと注意深く見ていたら、上からやらされたということはなかったのですが、同僚から「お前ががんばることによって、そうやってやらないとあかんやないか」とって、もう先輩の先生方に押さえ込まれてしまったのです。そのときは、先生も言わなかったのですが、後になって聞いてみたら、そう言っていました。こんなふうには足を引っ張るっていうこともあったのですが、今は、かなり違ってきたと思います。逆に、「あの人は子どもたちを引っ張るのがすごく上手や」となって、先輩方もそれを見習っていくような、そんな環境づくりをやっているかとあかんと思うのですがね。

(部会長)

後半は、事務局の方から、具体的に主体性や学習意欲を育むために今やっている事業とかを細かく中身まで説明していただいたのですが、議論は全体的な話になりました。これからも気がついたことがあれば、個別のテーマの中で、例えば入学者選抜の話であるとか、評価の話がありました。今後の議論の中でそれらは挙げていただきたいと思います。今回は、教員の話ですし、今日の中でもいくつか出ていましたので、きっと盛り上がると思います。時間がきたのですが、最後にもう一度これだけは言っておきたいということがあれば。

(委員)

議論ではないのですが、資料の作り方でちょっとお願いしたいことがあります。例えば26頁、27頁の「庁内WGの意見等から」というところ。県教育委員会事務局の中のご意見ですので、少し慎重に書いていただかなくてはならない。十分なバックデータをお持ちなのか、聞いてきた話なのか、その担当の方の思いつき、ひらめきなのか、と同時にこの表現の仕方も、方向性とまではいかないまでも、こんなことが必要じゃないのを書いてある項目もあれば、言い放して終わっているところもある。少し問題なんじゃないのかなと。この「個々の教員の力

に依存している状況です」という記述などは、この後がないですから、今後も個々の教員の力に依存するだろうなというふうな取り方もできなくはないですよ。この「庁内WGの意見等から」というのを、今後も載せるのであれば、十分ご検討いただきたいと思います。ここは公式の会議ですので、どこのだれそれが、こんなこと言っているというところまで書いてほしいと思います。公式なので、私たちの発言も全部載って公開されるわけでしょ。

それから施策の中で、子どもの主体性を育む取組内容をいろいろ書いていただいておりますけど、例えば32頁、「高等学校の柔軟なしくみづくり」のところ。今取り上げているのは、子どもの主体性・学習意欲の育成でしょ。「一家転住により現在校への通学が困難になる場合は、柔軟な対応を図っています」とありますが、これ、直接、子どもの主体性・学習意欲の育成とは関係がないのではないですか。このやり方が悪いというわけではありません。もう少し整理をされて出された方がいいのではないかと思いますのでご検討いただきたい。

(事務局)

わかりました。

(部会長)

資料は議論を活発にしたいという思いで挙げたと思いますが、次回またご検討ください。たぶん忙しいでしょうから、ボリュームをたくさんにしなくてもいいと思います。

(委員)

私、こういうリアルでいいと思うよ。わたしらにとってはこれが良いですが。

(委員)

資料の作り方とも関係するのかもしれないんですけど、例えば29頁の『主体性・学習意欲』を育むためにこれまで実施してきた取組について、今後どのような点に留意して、さらなる工夫改善を進めていけばよいか』についてですが、「視点」のところには、かなり中学校とか高校とかのそういう方向に収斂していく取組の方をたくさん書いていただいております。ただ、もっと23頁からのいろんな取組が載っているので、そういうことを総合してここで取組が行われていると理解していいと思うのです。多様な取組がされているので、そこら辺をうまく救い出していただけたらなと思っています。

それと同時に、ひとつの考え方なのですが、「主体性を育む」と言った場合に、例えば通学区のことも主体性の中に入れるのかって話になると、ちょっと観点が違うっていうご指摘もあり得ると思うのです。ただ、私なんかは、中高一貫とか、ちょっと注目しているところがあって、なぜかっていうと、一般には「中高一貫が特色あるいろんな学校をつくっていくから、そういう意味で子どもたちの主体性や学習意欲を育てる」と言われますが、そういうふうに考えるよりは、もっともっと中学校と高校が連携して、思春期から青年期にかけてひとつながりの中で、ちゃんと青年を一人前に育てていくっていう取組ができないかなというふうに思っているのです。こういう点から考えると、中高一貫教育みたいな取組ってというのは、子どもたちの主体性・学習意欲を育てていくというような見方もできるので、そういうことも含めながら、また議論していきたいなと思います。

(部会長)

3つの部会をもって、そして全体の会議に持って行ってですね、かなり日程的にはタイトな中で、こちらの会議もだいたい月1回ぐらいのペースですから、かなりハイスピードです。

今のお話を事務局はお聞きいただいたと思いますが、同時に委員の皆さんの中で、本会に持

ち込む資料がありましたら、事務局の方へご相談していただいて、積極的にやっていただけたらと思いますので、お願いいたします。

(副教育長)

ぜひよろしくをお願いします。

(事務局)

先ほどのご意見についてですが、事務局としても、できるだけご議論を活発にさせていただきたいということで、多くのことを書かせていただいています。庁内WGからと断り書きをしているものにつきましては、あくまで私も教育委員会の中での内部の意見として、できるだけ「こういうのもあったよ」といった程度で、捉えていただければ幸いです。それ自体がビジョンに反映されるという趣旨では書いておりませんので、そのところ、ある意味そこまで重く見ないでいただけたらなと思います。

(副教育長)

広い目で見えていただけたらと思います。この記述は、初めはなかったのです。議論をしていただくために、教育委員会がやってきたことについても、どういう点が足りなかったとかとか、やはり書くべきであろうということで、書かせたような次第でして、表現等が十分じゃないというご意見もありますけど、そのあたりは参考としていただいて、委員の皆様方で変えていただければと思います。これが直接ビジョンの中身になるってことではなしで、またこういう意見があったということもワーキングの方へ返していくこともできますので、部会長さんが言っていただいたように、ぜひ委員会討議が活発になればなと思いますのでなにとぞよろしくをお願いします。表現は気をつけていきますけども、活発なご議論をよろしくをお願いします。

(部会長)

時間がきましたので、今回はここまでにしたいと思います。本日の審議はこれで終わりたいと思います。あと事務局でお願いします。

(事務局)

熱心なご審議ありがとうございました。次回の会議の予定でございますけど、先ほども話の中にございましたように、12月17日木曜日、まだちょっと時間は確定しておりませんが、17日の午後、この場所、水産会館で開催させていただきますので、ご予約の方よろしくお願ひしたいと思ひます。

それではこれをもちまして、第1回の教育振興ビジョン検討第2部会の方を閉会させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(閉 議 15時35分)